
幼児の発達段階に応じたリトミック教育の有用性

年齢別グループ指導の実践を踏まえて

二見 美千代

Usability of Eurhythmics on developmental stage of children
Based the practice to guide of groups by age

Michiyo FUTAMI

キーワード：音楽身体表現、想像力、グループ活動、絵（イメージ）

1 はじめに

音楽の三要素の一つであるリズムは、地球上にあるものの多くに存在し、あらゆるものに影響を与えている。リズムが同期するという現象は生物においても無生物においてもみられるが、ヒトにおいては同期行動としてよく知られている。例えば保育の現場で子どもたちが集団になって同じリズムで行動すると、共感が生まれ、互いの関係が改善するという事例が挙げられている。保育の現場において音楽のリズムや様々な音楽的要素を表現するということは、個の音楽的能力を伸ばすという事以外に、他との関りを持つ取り組みの中で幼児の成長に様々な影響があるのではないかと考えられる。

本来、幼児は音や音楽を聴き、それに合わせて表現する力を持ち合わせているが、その力をより自由に表現できるようにするために、指導者や保育者は幼児期の著しい心身の発達に応じた指導をする必要がある。

平成29年3月に施行された幼稚園教育指導要領では、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」として、「(1)豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする『知識及び技能の基礎』(2)気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする『思考力、判断力、表現力等の基礎』」を掲げている。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「(2)自立心 (3)協同性 (4)道徳性・規範意識の芽生え (6)思考力の芽生え (10)豊かな感性と表現」を掲げている¹⁾。

エミール・ジャック＝ダルクローズ^(注1)が考案した教育法であるリトミックについては、多くの音楽教育者にその効果が周知されている。「リトミック教育効果のひとつは、音楽と動きを結びつけることによって「心身の一致・調和」を図ることにあり、そのことによって集中力・即時性・注意力・観察力・判断力・反応力・想像力・創造力などの能力を高めていく」と神原・野上は述べている²⁾。また音楽教育者であり、リトミックにおける指導書などを著した吉田は、リトミックの指導テクニックの一つである「即時反応によって精神面では、集中力・記憶力・判断力・思考力・創造性・積極性・自動性・協調性・直観力を高めることができ、身体面では、脳全体の能力が活性化され、敏捷性・反射性・反応力・運動能力が高まり、筋肉感覚が身に付きます」³⁾と述べている。さらに吉田は、板野氏^(注2)の考え方を受けてリトミックは幼児教育者から広く支持を受けてきたとも述べている。その考えとは、「リトミック指

導によって幼児に、精神力・集中力・心身の相互作用・反応力・反射性・積極性・直観力・記憶力を高めつつ、リトミック指導が他の5領域（1. 健康、2. 人間関係、3. 環境、4. 言語、5. 表現）に密接に関連づけられていくような保育全体の展開を持つべきである。人間育成の教育、すなわち人間教育を目指しているのがリトミック教育である」⁴⁾ というものである。国際的な音楽教育者であるエリザベス・バンドゥレスパーは、リトミック教育の目的・目標のうち全般的な要素の中に「他人のアイデアに順応できる力」、「他人のアイデアから新しいアイデアを創造できる力」、「個性を育て、自己を抑制したり、決断を促す力」⁵⁾ を挙げている。

これらのことから、リトミック教育が、幼稚園教育指導要領における「幼稚園教育において育みたい資質・能力」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」¹⁾ を育むためには有効的な教育であるといえる。

幼児におけるリトミック指導では、自然や季節の行事など生活の中で行う事柄をイメージしながら音楽的な表現をする取り組みが多く行われている。その内容は、主に指導者のピアノ演奏を聴きながらそのイメージを身体の動きやリズム楽器またオノマトペ（擬音語）などで表現し、歌などを使って音楽的要素を経験することであり、これらは領域「表現」のねらいに一致している。また、絵本や物語などを用いて想像を巡らせながら豊かなイメージをもち、言葉の響きやリズムを使う楽しさを味わう内容であることは領域「言葉」の内容の取扱いに一致している。

2 リトミックにおいて絵本や絵を使うことの有用性

絵本を使ったリトミック指導について吉田は、「絵でものを、考える時代に絵本は必要でありだんだんことばをきくだけで、物事をイメージできるようになるための最初の一步です。」⁶⁾ と述べている。リトミック指導を行う時に絵本や絵を使うことは、子どもの想像力を養い、そのイメージを膨らませ、想像の世界観を楽しみながら様々な表現活動を行うことができる重要な要素のひとつであると考えられる。

幼児におけるリトミック指導では、子どもの生活や季節の行事など体験を通した題材や、「宇宙」や「海の底」など想像の世界を題材にすることが多く、子ども達は様々な想像をしながら“ごっこ遊び”を通して音楽的要素を身体表現する。絵本を使った場合、その物語が子どもにとって既知であるならば、子ども達は親しみのある世界感に無理なく入ることができる。また絵を使った場合は、指導者が物語の内容（あらすじ）を考えて指導展開するため、子どもは初めて出会う物語に対して集中し耳を傾けるであろう。

このように、絵本や絵は子どもの想像力を容易に膨らませることができ、幼児のリトミック指導において欠かせないツールの一つであり、子どもの想像力・記憶力・集中力を養い、感情・感覚を豊かにする教材であると考えられる。

3 研究の目的

本研究では、領域「表現」や領域「言葉」の双方を絡めた指導として、発達段階をふまえたリトミック指導の在り方について、実践を通して具体的に分析し、さらにその指導法について探究する。

子どもが何かを表現しようとするときはどのような場面で起こるのか、例えば音や音楽を聞いた時、また絵本を読み聞かせた時や絵を見た時など、心を動かされる何かが起こった時が考えられるが、音楽と絵を融合させた場合、子ども達の表現力にどのように影響があるのか明確には分かっていない。

この問題に取り組むための一つの方法として、実際に絵本や絵を介した音楽表現活動を行いながら子どもの表現がどのように育まれていくのかを調査、分析するという方法が考えられる。

これらの考えに基づき、本研究では、「年齢別グループによる取り組みを行い、発達段階におけるリトミック教育の在り方とその有用性を探ること」、また「絵（視覚的イメージ）を介しながら音楽身体表現

活動を行い、絵と音楽身体表現の関連性を探ること」の2点を研究目的とし調査、分析したい。

4 研究方法

(1) 実施期間、場所、対象者

期 間：2019年12月

時 間：1グループ40分

グループ数：3グループ

対 象 者 数：13名

場 所：千葉市の音楽教室

(2) 対象者の概要

同音楽教室に在籍中で研究に同意を得られた13名を対象とした。その内訳は、年少児とその母親5組、年中児5名、年長児3名である。対象者の受講歴については、年少児は、2018年に2歳児から受講している男児2名、2019年に年少児から受講している女児1名、男児2名、年中児は、2017年に2歳児から受講している男児1名、女児1名、2018年に年少児から受講している男児1名、女児2名、年長児は、2017年に年少児から受講している女児1名、2018年に年中児から受講している女児2名である。年少のグループでは母親同伴とした。これは年少児の発達段階と母子協働の観点からの判断である。

また、対象者全員が受講開始時から継続的に受講しており、対象者の受講開始時期にばらつきがあるため個々の経験値に多少の違いはあるが、本研究の目的は発達段階の比較ため研究目的には差し支えないと判断した。

(3) 調査、記録、分析の方法

筆者は、2017年、千葉市生涯学習センターにおいて「まなびフェスタ2017」にて「リトミックで遊ぼう！」講座を開催し、対象者を0歳児から2歳児の親子、3歳児から5歳児の幼児に分けた年齢別指導により、幼児の発達段階により異なる関心事項の調査を行った。

また、1991年よりリトミックの研究に取り組み、2017年より千葉市の音楽教室において乳児と保護者、また幼児を対象に、リトミック指導を定期的に実施し、2歳児から5歳児までを、年齢別により詳細に調査、分析した^(注3)。現在、これらの乳幼児の研究を継続している。

これらの調査・研究の指導内容は、幼稚園教育指導要領の領域「環境」の内容に配慮し、自然現象や正月や節句などの我が国の伝統的行事、生活の中で行う事柄を中心に題材を決め、身近な動植物に関心が持てるよう考慮した。

本研究は、以上の調査・研究を踏まえ実践した。本研究の調査、記録の方法においては以下のとおりである。

筆者が、各グループにリトミック指導を実践し、その様子を固定ビデオカメラ1台、カメラ1台で撮影、記録した。また、子ども達が実践中に書いた作品を調査した。

また、記録の分析においては、ELAN^(注4)による動画解析を行った。観察によって得られた動画記録を「講師の発話」「講師の動き」「子どもの発話」「子どもの動き」の4項目の注釈層に分け、すべての項目に注釈を入れた。書き起こした記録から、「絵」と「音楽」の関りによって生まれる子ども達の発話や動きの相互関係を検証した。また、子ども達が実践内容に応じて書いた作品を用いて年齢別に分析した。

(4) 倫理的配慮

本研究における研究協力に際しては、研究目的、参加の自由、匿名性を口頭と文書で説明し、同意書により了解を得た。同意署の内容は、以下のとおりである。

調査にあたりましては、以下のことをお約束申し上げます。

1. 調査は研究を目的と致します。調査過程で得た情報をこれ以外の目的に使用することは一切ありません。
2. 調査にはあくまでも任意でご参加いただけます。研究途中であっても、参加を取りやめることが自由にできます。
3. 調査及び研究発表の全過程を通して、研究に関わる全ての個人の権利を最大限尊重致します。
4. 調査を通して得たデータはパスワードのかかるコンピューターのみで管理するなど厳重に管理し、無断で第三者に供することはありません。また研究終了後には適切な方法で破棄致します。
5. 研究論文執筆及び学会発表にあたっては、お子様の個人名はすべて匿名と致します。

5 実践結果と考察

ここでは、子ども達の発達段階を踏まえ年齢で分け、全ての年齢グループにおいて同題材を取り上げ、発達段階による実施内容の違いとその在り方について考察する。

今回12月の行事として“クリスマス”を題材に取り上げ、“サンタさんのお手伝いをする”イメージにおける音楽的要素の表現活動を主な実施の目的とした。なお、本研究は「発達段階による指導」の比較が目的のため、年中児・年長児の実施内容は年少児の実施内容を元に、比較対象とする部分のみ調査、分析の対象とした。このため、図1から図7までの実施内容における指導目的は通し番号としている。

(1) 年少児グループ

年少児は子ども達が安心して活動を行うことができるよう母子協働とした。対象者である子ども達は事前の研究において、四分音符、二分音符の身体表現を行った経験があるため、四分音符は「ター」、二分音符は「ブーン」という語で音の長さを表現することなどを理解しているものとする。

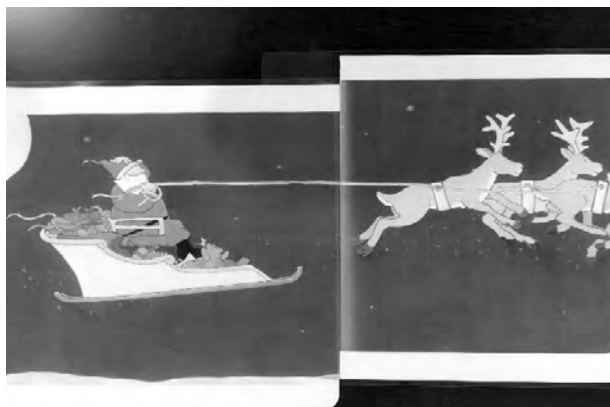


写真1

「そりに乗って空を飛んでいるサンタクロース」の絵



写真2

「そりに乗って空を飛んでいるイメージ」の動き

初めにサンタクロースの絵を子ども達に見せる（図1-①）と、一斉に「クリスマス!」、「サンタクロース!」など、講師が話し始める前から一気に絵の世界に入り込んだように見受けられ、飛び上がる動作や笑顔も見られた。「サンタさんがみんなの所にプレゼントを運ぶのだけど、お手伝いをしてくれるかな?」の呼びかけには、全員で「いいよー!」と参加意欲を見せた。次に講師が“そりに乗って空を飛んでいるサンタクロースの絵”（写真1）を見せ、「みんなもそりに乗っているみたいに走ろう」と声掛けをしながらピアノで速い速度の音楽を弾く（図1-②）と、子ども達はフープを持って走り出した（写真

2)。この時、男児4名はすぐに走り出したが、女児1名は母親の元から離れず他の子ども達の様子を見ていた。この女児は、“音楽・音による即時的な身体表現”（図1-④）まで母親の傍にいたが、その後、他の子ども達の様子を見ながら動き始めた。事前の研究において、この女児は突然の変化に対して戸惑う傾向と自分のタイミングで再度参加することができる様子が見られていたため、本実践においても本人の意思に任せて指導の流れを止めずに続けた。その結果、この女児は“音楽の聴き分けと身体表現”（図1-⑤）から自ら取り組みに参加することができた。

このように、子どもが何かのきっかけ（精神的不安）で取り組みに参加できなくなった時、無理に参加させることなく安心して戻れるまで待つことは、子どもの自立心を育むことになる一つの方法になるのではないかと考えられる。

“即時的な身体表現”として“雪だるまに変身する”取り組み（図1-③）では、講師の言葉がけだけでは子ども達はどのようにいいのか分からない様子で動きが止まっていたが、講師が色々なポーズで雪だるまのヒントを示すと、子ども達は自分だけの雪だるまのポーズを表現した。

このことから、何か新しいことをする場合、ある程度のヒントや思考するための材料を示すと子ども達は行動に移しやすいということが分かる。

“リズムの経験”（図1-⑥-2）では、「ジングルベル」と言いながら言葉のリズムに合わせて鈴を鳴らすことを子ども達は容易に表現できた。この子ども達は、事前の研究において四分音符は「ター」、二分音符は「ブーン」という語で表現することを理解しているため、音符カードを見るとすぐに「ター」や「ブーン」という語を発することができた（写真3）。またこの子ども達は“二分音符＝長い音符”ということは理解しているが、この場面では座位の状態のため「ブーン」と言いながら二分音符カードに手を乗せたまま動きが止まってしまった。そこで上半身全体を使って“長い動き”を表現するように指示したが、この時も講師が動きのヒントをいくつか示すことで、子ども達は思い思いに上半身を使って長い音の表現をすることができた。また、“スケッチブックに書く”取り組み（図1-⑥-5）では、「ターターブーン」と言いながら、クレヨンで横線を書き音符の長さを線の長さで表現することもできた（写真4）。

これらの実践により、子ども達は発語、聴覚、手の動き、視覚の四点から音符の長さを体験し、四分音符と二分音符の音の長さの違いを理解したと考えられる。

年少児における本実践のまとめとして、“ベル”、“そり”、“サンタクロース”、“プレゼント”の四つの絵を見せ、“言葉のリズムを楽器で鳴らす”取り組み（図1-⑦）を行った（写真6）。タンブリン、太鼓、クラベスにおいては叩く動作によって音が出るが、マラカスは振る動作によって音が出る。マラカスの場合はこの音が出る原理の違いによってリズムのタイミングが外れることが多かったが、本研究の目的においては多少のずれは問題ないと判断した。



写真3 年少

音符カードを並べたリズムをタッチしながら「ターターブーン」



写真4 年少

「ターターブーン」と言いながら音符の長さを書く

この取り組みで扱ったリズムは年少児にとって難しいものではないが、言葉を介することにより、子どもにとってより簡単に楽しくリズムに慣れ親しむことができたのではないだろうか。

年少児の考察を整理すると以下のようになる。

- ・子どもが何かのきっかけ（精神的不安）で取り組みに参加できなくなった時、無理に参加させることなく安心して戻れるまで待つという事は、子どもの自立心を育むための一つの方法であると考えられた。
- ・何か新しいことをする場合、ある程度のヒントや思考するための材料を示すと行動に移しやすいことが分かった。
- ・発語、聴覚、手の動き、視覚の四点から音符の長さを体験し、四分音符と二分音符が持つ音価を体得したと考えられる。
- ・言葉を介したリズムにより、より簡単に楽しくリズムに慣れ親しむことができたと考えられる。

図1 実施内容(年少)

指導目的	指導内容	留意点
①導入	サンタクロースの絵を見せ、クリスマスに関した話をしながらイメージを膨らませる。子ども達の発言を絡めながら以降の内容に繋げる。	子ども達が、楽しいクリスマスのイメージを想像できるように言葉がけをする。
②速い速度の動きと即時的な静止	そりに乗っているサンタクロースの絵を見せ、そりに見立てたフラフープの中に入って持ちピアノの音が聞こえたら走る。子ども達は“そりに乗って空を飛んでいる”イメージで走る。ピアノの音楽が止まったら動きも止める。	母親は子の動きを見守る、若しくは子と一緒に動く。
③“絵”(イメージ)による遅い速度の動き(静かなイメージ)と即時的な身体表現	忍び足で歩いているサンタクロースの絵を見せ、「寝ている良い子を起こさないようにそーっと歩こう」と声掛けをしながら講師と一緒に静かにゆっくり歩く。雪だるまの絵を見せ、「雪だるまに変身!」と声掛けをし、即時的に“雪だるま”のポーズをする。	フープの色は好きな色を選ばせるが、色の取り合いにならないように配慮する。母親は子の動きを見守る、若しくは子と一緒に動く。
④音楽・音による即時的な身体表現	ピアノで静かにゆっくり歩く音楽を弾き、時々高音で合図をする。子ども達は、ピアノを聴きながらそーっとゆっくり歩き、高音の合図で“雪だるま”のポーズをする。	母親は子の動きを見守る、若しくは子と一緒に動く。
⑤音楽の聴き分けと身体表現	ピアノで“そりに乗って空を飛んでいる”イメージと“そーっとゆっくり歩いている”イメージの音楽、“雪だるま”の合図の音を弾き、子ども達はピアノの音楽を聴いて感じたイメージの動きをする。	母親は子の動きを見守る、若しくは子と一緒に動く。
⑥リズムの経験	1) 楽曲『ジングルベル』を歌う。(鈴を持つ)(資料) 2) “ジングルベル”の部分の繰り返し歌いながら鈴を鳴らす。 3) 四分音符カードを二つ、二分音符カードを一つ並べ、「ジングルベル」と歌いながらカードをタッチする。 4) 「ターターブーン」と言いながら、上記のカードをタッチする。 5) スケッチブックに、「ターターブーン」と言いながら音符の長さを書く。	母親も一緒に歌う。 2)、3)、4) 共通、ピアノは”ジングルベル”のリズムを繰り返し弾く。 子ども達は、音符の長さを動きで表現する。
⑦リズムの真似っこ遊び	“ベル”“そり”“サンタクロース”“プレゼント”の四つの絵を見せる。 1) 絵を見ながら言葉の真似をする。 2) 絵を見ながら打楽器(タンブリン、太鼓、クラベス、マラカス)で言葉のリズムの真似をして鳴らす。	母親も一緒に行う。

(2) 年中児グループ

年中児においては、幼児の精神面において積極性・協調性を視野に入れた実施内容とした。ここでは、年少児の実施内容と同じ課題においては図1を参照とし、実施内容に変更のある課題においては図2・3・4を参照とする。

初めに講師の「サンタさんってどんな風に動くのかな?」という呼びかけに、子ども達は「プレゼン

トをよいしょ、よいしょってやってる。」「クリスマスイブの日にお利口にしていたらこうやってプレゼントを持ってくる。」などの発言や、自らサンタクロースのイメージを動きで表現した(図1-①)。次に子ども達が“そりに乗って空を飛んでいるサンタクロース”のイメージで走っているとき、講師がピアノの音を止めるタイミングにおいて、まず長いフレーズのタイミングから行い、次に短いフレーズのタイミングに変えて、次第に両方をランダムに変化させた(図1-②)。この時の子ども達は、初めにピアノ音が止まるタイミングの変化の対応は難しいようだったが、続けて同じタイミングで行った場合はすぐに対応できた。

このことから、子ども達は音楽を集中して聴くことができ、さらに音楽の変化にも対応できるという事が分かる。

“即時的な身体表現”として“雪だるまに変身する”取り組み(図1-③)では、年少と同様に講師がポーズのヒントを示したが、子ども達の動きは変化に富んでいた。おおよそ男児は“カッコいいイメージ”、女児は“かわいいイメージ”のポーズを取り、その中でも個々の主張がみられた。

この点を年少児と比較すると、年中児の方が動きの種類が多様化し、他児との無意識的な同期または意識的な違いを図ることができると考えられた。

子ども達がピアノの音を聴きながら静かにゆっくり歩き、高音の合図で“雪だるま”のポーズをする取り組みと、さらに“そりに乗って空を飛んでいる”イメージを加えた取り組み(図1-⑤)は、ピアノの音楽の聴き分けをしながら身体表現をするというものである。

年中児では、全員がピアノの音の変化を聴いて素早く反応していたことから、複数の合図を示しても集中力を切らさず音楽を聴き取ることができたと考えられる。

“リズムの身体表現(1)”(図2-⑥)では、まず楽曲『ジングルベル』を歌った。このとき子ども達に鈴を持たせると、女児2名がすぐに「ジングルベル」と歌いながら言葉のリズムで鈴を鳴らし始めた(図2-⑥-1)。その女児達に続くように他の子ども達も同様に行い始めたため、講師は子ども達の歌に合わせる形でピアノを弾くという流れになった(図2-⑥-2)。

これらのことから、この女児2名の“自動”と他の子ども達の“協同”が育まれたと考えられる。これは本実践においては、年少児には見られなかった現象である。

“鈴が鳴る”のリズムの身体表現(図2-⑥-4)では、座位の状態では主に腕の動きで表現することとした。初めは年少児同様、長い音を表現するときに腕の動きが止まってしまったが、講師が動きのヒントを示すと同様の動きをすることができた。「他にも面白い動きはないかな?」という呼びかけに、男児が身体をくねらせて表現し、他の子ども達も面白そうにその男児の真似をした。立位での動きの表現では、上半身だけでなく全身を使って表現することができる。年中児では、(写真5)のように腕と足を大きく動かすことで音符の長さを表現することができた。“ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る”のリズムを手で叩く取り組み(図2-⑥-5)において、手で叩いた“鈴が鳴る”のフレーズのリズムをスケッチブックに記したものが(写真7)である。よく見ると付点四分音符の部分が大きく強調されていることが分かる。

これは、“鈴が鳴る”のリズムを鈴で鳴らすこと(図2-⑥-3)と同リズムを身体表現する(図2-⑥-4)ことを行った際、付点四分音符の長さや音の重さを感じる表現について“体重移動”に焦点を当てて行った結果このような表現になったと考えられる。

“リズムカードに絵を組み合わせるパズル”をする取り組み(図3-⑧-2)では、音符カードで作ったリズムに“ベル”、“そり”、“サンタクロース”、“プレゼント”の四つの絵を合わせた。子ども達は、“リズムの真似っこ遊び”の取り組み(図1-⑦)においてあらかじめ絵を見て言葉のリズムを打楽器で鳴らしているが、ここでは音符の音価^(注5)を理解していないとこのパズルはできない。絵を渡された子ども

がどのリズムに合わせたら良いのか戸惑っている様子も見られたが、他の子ども達が傍で絵の言葉を言いながらそのリズムを楽器で鳴らし、子ども達同士で相談しながらパズルを完成させるといった協調性も見られた。

本実践においての年中児のまとめとして、主に“足の動きによるリズムの身体表現（2）”（図4－⑨）を行った。この取り組みにおいては、前進しながら足の動きによってリズムを表現するのだが、聞こえたりリズムの通り動くことができたのは女児2名であった。その他の子ども達はその場でリズムの足踏みをしている若しくは足が動いていない様子がみられた。

これは、同年齢においても発達段階の差異によって表現力の違いがみられたのではないかと考えられる。

図2 実施内容(年中)

指導目的	指導内容	留意点
⑥リズムの身体表現 (1)	1) 『ジングルベル』を歌う。(鈴を持つ) 2) “ジングルベル”の部分を繰り返し歌いながら鈴を鳴らす。 3) “鈴が鳴る”の部分のみリズムを鈴で鳴らす。 4) “鈴が鳴る”の部分のリズムを身体の動きで表現する。 座位では腕の動きで表現、立位では腕に加えて全身の動きで表現する。 5) “ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る”のリズムを手で叩く。 6) “鈴が鳴る”の部分のリズムをスケッチブックに書く。	3)、4)、5) 共通、付点四分音符と八分音符の組み合わせでできるリズムの表現に注意する。 6) 音符の長さを考慮して書く。

図3 実施内容(年中)

指導目的	指導内容	留意点
⑧リズムの聴き分け	1) 講師が⑦で使用したリズムを音符カードで並べ、子ども達はそのリズムを見ながら打楽器を鳴らす。 2) リズムカードに⑦で使用した絵を組み合わせるパズルをする。 3) 講師がピアノで上記のリズムを弾き、子ども達はどのリズムかを当て、リズムの言葉を言いながら打楽器で鳴らす。	図1－⑦で鳴らしたリズムとは、ベル・そり・サンタクロース・プレゼントの四つ。

図4 実施内容(年中)

指導目的	指導内容	留意点
⑨リズムの身体表現 (2)とカノン	1) “ベル”と“そり”を一組にして他の二つと合わせた三つのリズムとし、それぞれのリズムをステップする。 2) 講師のピアノと子供のステップでリズムのカノンをする。	音符の長さを身体全体で表現し、リズムの持つニュアンスを感じ取る。



写真5 年中
「鈴が鳴る」のリズムを身体表現



写真6 年中
打楽器で言葉のリズムを表現

年中児における考察を整理すると以下のようになる。

- ・子供たちは音楽を集中して聴くことができ、音楽の変化にも対応できることが分かった。
- ・年少児と比較すると、年中児の方が動きの種類が多様化し、他児との無意識的な同期または意識的な違いを図ることができるという事が考えられた。
- ・複数の合図を示しても、集中力を切らさず音楽を聴き取ることができると考えられた。
- ・リズムを身体表現する際、音符の長さや音の重さを“体重移動”に焦点を当てて行くと音符の書き方にも反映されるのではないかと考えられた。
- ・歌いながら言葉のリズムを鈴で鳴らすという動作による、子ども達の“自動”と“協同”が育まれたと考えられた。
- ・子ども達同士で相談しながら完成させるという協調性が育まれたと考えられた。
- ・同年齢においても発達段階の差異によって表現力の違いがみられると考えられた。

(3) 年長児グループ

年長児においては、「他人のアイデアから新しいアイデアを創造できる力や個性を育てる」⁷⁾ こと、また子ども達の発想力や主体性を視野に入れた指導内容とした。ここでは、年少児の指導内容と同一課題においては図1を参照とし、指導内容に変更のある課題においては図5・6・7を参照とする。

実践開始直後に子ども達からカラーボールを使いたいとの要望が出たため、予定を変更して“音楽・音による即時的な身体表現”(図1-④)を行った。さらにカラーボールをサンタクロースが運んでいるプレゼントに見立て、「落とさないようにそーっと持って運んでね」という呼びかけに変更した(写真9)。これらの変更の際には、本実践の目的に差し支えないという点と、子ども達の発想力や主体性を重んじる観点から問題ないと判断した。年少児・年中児にて使用した“絵”は年長児においては使用せず、イメージの言葉がけのみで指示を出したが、子ども達はこのイメージ活動を問題なく行うことができた。“速い速度の動きと即時的な静止”(図1-②)の取り組みにおいても、絵を見せずにイメージの言葉がけのみとし、講師がピアノで速いテンポの音楽を弾くと子ども達はすぐに反応して走り始めた。ピアノの音を止めると子ども達の動きもすぐに止まり、再び速いテンポの音楽が聞こえると走り始めた。また“音楽の聴き分けと身体表現”(図1-⑤)では、次々に変化するピアノの音楽に躊躇することなく素早い反応力を持って動き始めた。

これらのことから、事前の研究により同様の指導目的において題材を変えながら実践を繰り返したことにより、子ども達の集中力や反応力が高まったと考えられた。

“リズムの身体表現”(図5-⑥)の取り組みでは、“ジングルベル”の部分のリズムは問題なく鳴らすことができたが、“鈴が鳴る”の部分のリズムでは、タイミングは合っているが長い音符を表現するときに動きが止まってしまった。これは、年少児・年中児においても同様にみられたことである。この“すずがなる”の“が”と“な”の部分は、付点四分音符と八分音符の組み合わせでできているリズムであり表現が難しいためと考えられた。そこで普段の生活の中からイメージしやすいもので例えて、“納豆がネバ~っとしている様子”と言葉によるヒントを示すことで分かりやすくイメージを伝えた(図5-⑥-4)。納豆が好きな子でも嫌いな子でもこの“ネバ~とした”という表現は理解しやすく、指導者が動きのヒントを示すと楽しんでイメージ通りの動きができた(写真10)。

このように年長児では、生活に密接した事柄や言葉によって多くのことがイメージしやすくなると考えられる。

同課題において、年中児は指導者の動きからヒントを得られたのに対して年長児では言葉からヒントを得ることでイメージを膨らませ、身体表現に結び付けることができた。また“リズムを書く”取り組み(図5-⑥-5)では年中児より長いリズムに挑戦した。(写真8)を見ると、二分音符の部分が広く書



写真7 年中
「鈴が鳴る」リズム

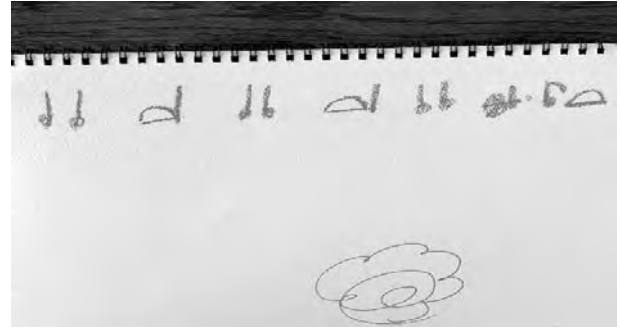


写真8 年長
「ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る」リズム

かれている。

これは“リズムの身体表現”によって“二分音符は長い音符”という認識を持つことができたといえるのではないか。

“リズムの真似っこ遊びをする”取り組み（図1-⑦）では、年長児においては四つのリズムを手で叩く取り組みのみ行い、すぐに“音符でリズムを作成する”取り組み（図6-⑩）を実施した。この時、子ども達にヒントを示さず音符カードを渡し、先に手で叩いたリズムになるように音符カードを並べるよう指示をした。子ども達は、「サンタクロース」などの言葉を発しながら音符カードを選んで並べていた。「プレゼント」のリズムを担当した子どもは、言葉通りに音符カードを並べることはできたが最後の休符部分に音符を置いていた。「サンタクロース」のリズムを担当した子どもは、「サン」の部分を四分音符一つ、「タク」の部分は八分音符二つの音符カードで表現しなくてはいけないところを逆にカードを並べてしまい困惑していた。そこで、この2名の子どもに対し言葉を発しながらその言葉の音に合わせて手を叩く指示をしたところ、どちらの子どもも言葉と手の動きを一致させることができ、その後音符カードを正しく置くことができた。

このことから、“言葉の持つリズム”を“音符によるリズム”として表現するためには、そのリズムの身体表現をより正確に行うことで可能になるということが分かった。

本実践における年長児のまとめとして、“ピアノの黒鍵によるリズム即興演奏”（図7-⑪）を行った。即興演奏はリトミック教育の中で重要な要素の一つとして扱われている。ここではピアノを弾くという感覚ではなく、リズムを表現するツールとしてピアノを打楽器的な要素の扱いとした。筋力の個体差があり、指の力が弱い子どもにおいてはリズム通りに手を動かしても鍵盤が重くピアノの音が出ないという現象が起こった。この子どもに、手をげんこつにして音を出すよう指示をしたところ、本人が思ったようにピアノで表現することができ、ピアノの音の響きを楽しんでいるようにもみられた。

このことから、この年齢の子どもにとってピアノの黒鍵を指の力だけで弾くのは難しい場合があるという半面、黒鍵の響きは不協和音にならず子どもが楽しんでピアノで表現するということができるという利点もあることが分かった。

年長児における考察を整理すると以下ようになる。

- ・ 題材を変えながら実践を繰り返すことにより、子ども達の集中力や反応力が高まったと考えられた。
- ・ 生活に密接した事柄や言葉によって、多くのことがイメージしやすくなると考えられた。
- ・ リズムの身体表現をすることによって“二分音符は長い音符”という認識を持つことができると考えられた。
- ・ “言葉の持つリズム”を“音符によるリズム”として表現するためには、そのリズムの身体表現をより正確に行うことで可能になるということが分かった。



写真9 年長
プレゼントを持ってそーっと歩く



写真10 年長
「納豆ネバ〜っと」

図5 実施内容(年長)

指導目的	指導内容	留意点
⑥リズムの身体表現とリズムを書く	1) 『ジングルベル』を歌う。(鈴を持つ) 2) “ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る”を歌いながらタンブリンでメロディーのリズムを鳴らす。 3) “鈴が鳴る”の部分のみ、一人ずつ歌いながらタンブリンを鳴らす。 4) “鈴が鳴る”の部分のリズムを身体の動きで表現する。“納豆がネバ〜っとしているように”などのイメージを伝える。 5) “ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る”の部分のリズムをスケッチブックに書く。	3)、4) 共通、付点四分音符と八分音符の組み合わせでできるリズムの表現に注意する。音符の長さを身体全体で表現し、リズムの持つニュアンスを感じ取る。 5) 音符の長さを考慮して書く。

図6 実施内容(年長)

指導目的	指導内容	留意点
⑩音符でリズムを作成	音符カードを組み合わせで図1-⑦で叩いたリズムを作り、該当する絵に合わせる。	全員違うリズムを担当させる。

図7 実施内容(年長)

指導目的	指導内容	留意点
⑪リズムを使った即興演奏	図1-⑦で叩いたリズムをいくつか組み合わせてリズムを作り、ピアノで即興演奏をする。	ピアノの黒鍵のみを使用する。一人ずつ演奏する。

・この年齢の子どもにとってピアノの黒鍵を指の力だけで弾くのは難しい場合があるという半面、黒鍵の響きは不協和音にならず幼児が楽しんでピアノで表現することができる利点もあることが分かった。

6 まとめ

本研究では、子ども達を年齢別のグループに分け、発達段階におけるリトミック教育の在り方とその有用性について実践検証を行いながら、子ども達の想像力を膨らませるツールとして“絵(視覚的イメージ)”を介した音楽表現活動を行うことで絵と音楽表現の関連性を探索した。

今回の実践では、同一題材において年齢別に働きかけの方法を変えた取り組みを行い、発達段階による違いを調査・分析したことにより、子ども達の反応や表現に相違点が多くあることが分かった。

年少児グループでは、“音楽”、“絵”、“言葉”などの多くの働きかけにより、子ども達のイメージを膨

らませることができた。年少児においては、子どもが音楽表現をするにあたって、多方面からの働きかけが必要であることや、子ども達にとって分かりやすさが大切であると考えられた。

また、年少児における母子協働においては、母親は子どもとの関りによりイメージを引き出す役割を担うことや、母親の存在により子どもの精神的安定を図り、子どもが取り組みに集中しやすい環境を作り出すことができるということが明らかになった。このことから、年少児の子ども達が落ち着いてグループ活動に取り組むことにおいて母子協働は有用性があると考えられた。

年中児グループでは、“絵”や“言葉”の働きかけの場面に対し“音楽”による働きかけの場面を多くしたが、年少児と比較すると子ども達の想像力や音楽表現力は高く、多種多様にも感じられた。

また、子ども達の発言や身体表現において他児との違いの主張（自立心）や、他児と協力する場面（協調性）もみられた。子ども達は他児とのコミュニケーションを楽しみながら表現活動を行っていたことから、この年齢では「リトミック」が社会性を育てることに有効であるとも考えられる。

年長児グループでは、集中力の継続や“音楽”や指示に素早く反応する様子、また取り組みに対して子ども達から次々にアイデアが出るなどの子どもの発想力の高さなどがみられた。さらに本実践において、全ての取り組みに対して子ども達の積極性が感じられ、表現活動を全身で楽しんでいる様子がみられた。

このように、年齢別におけるリトミック教育の実践は、子どもの発達段階に応じた働きかけの工夫により有用性があるということが明らかになった。

また、各グループ内では実施内容において全員に同様の働きかけを行ったが、子どもの個々の反応に差異があり興味深いものがあつた。これは、子どもの発達段階における精神的・身体的な“できること”と“できないこと”の差異、また男女の違いや性格の個人差による影響もあるのではないかと考えられる。

また、同グループ内において様々な反応や表現の違いの共有により、子ども達からは“自分と違うことをしている”、“面白い”といった発言がみられた。自分と違う他児の表現の真似をすることや、さらに自分なりに工夫することで思考力・判断力・表現力を養うことに結び付くのではないかと考えられた。リトミック教育では、個性を育てながら他のアイデアを受け入れ、それを元に新しいものを創造できるよう指導していく。本実践では子ども達を年齢別のグループに分けて、発達段階に合わせたリトミック教育を行うことにより、子ども達にとって理解しやすく自動性・協調性・積極性などを無理なく育むことができた。これらのことから、リトミック教育は発達段階別のグループの取り組みにおいて有用性があると考えられた。

本実践では、12月の行事として“クリスマス”を題材とした。これは子供たちにとって楽しみにしている行事の一つであり、今回参加した全ての子どもがサンタクロースの“絵”を見た瞬間に歓声を上げるなど喜びを表していた。絵を見ることにより、活動意欲は一気に高まったように思われる。このことからイメージを膨らませるツールの一つとして“絵”が年齢にかかわらず、有効であると言えるだろう。

年少児グループにおいては、“言葉”による働きかけに対し“絵”による働きかけの反応の良さは顕著であった。これは、年少児にとって具体的なイメージを膨らませるための補助として、“絵”が大きな役割を担っているためと考えられる。

年中児グループにおいては、想像力を補うために“絵”や講師からのヒントが必要な場面もあつたが、年少児と比較するとそれらのヒントに頼らず、イメージに関する発言や自ら音楽表現活動を試みるものが多くみられた。これは、子ども達が自己表現の楽しさを味わい、他に認めてもらいたいという感情が込められているためと考えられる。

しかし“絵”の有用性は各年齢グループにおいて同一ではない。

年長児グループにおいては、“絵”を必要とする場面は多年齢と比較すると少なく、“音楽”による働きかけの補助として“言葉”や“絵”を加えた。これは、年長児は概ね“絵”がなくてもイメージがで

きる力、すなわち“音楽”や“言葉”だけでイメージができる力を持っているためと考えられた。

本来“音楽”を主体に働きかけるリトミック教育では、音楽を感じて身体表現活動をするのであるが、本実践のように表現する事柄を指定する場合、想像力を伴った音楽表現活動を行うことになる。年長児になると“言葉”によるイメージをする力が育ってきているが、言語発達の初期である年少児においては“言葉”だけではイメージにつなぐにくい。聴覚的に働きかける“音楽”や“言葉”と、視覚的に働きかける“絵”を介して、子どもはよりイメージをすることが容易になり、想像力を膨らませ楽しみながら音楽表現活動をすることができるのではないかと考えられる。

“絵”を介した音楽表現活動において、年齢の違いによる“絵”の必要性に差異はあったが、今回の実践に参加した全ての子どもにおいて“絵”（視覚的イメージ）に有用性があったと考えられた。

このように本研究では、リトミック教育における“絵”（視覚的イメージ）の重要性やその効果、子ども達の発達段階やその個人差を考慮した指導法の工夫は、子ども達の音楽表現活動に大きく影響することが明らかになった。

7 今後の課題

本実践では、子どものイメージを膨らませるために“絵”を介したリトミック指導を行った。今回の実践を通して“絵”の効果は大きく、子ども達は“絵”を見た瞬間にその世界感に飛び込んだようにも感じられた。しかし、“絵”を介さずに指導した場合では子ども達はどのような反応なのか。今回は、“絵”を介した指導とそうでない指導の比較は行っていない。また、子どものイメージを膨らませるツールとして“絵”や“絵本”の他には何があるのか、この点について今後さらに探求をしていきたい。

本研究においては、実践の上でグループの人数をあまり多くすることはできない。そのため対象者の人数が少なくなってしまう。今回の分析結果だけでは十分ではないため、今後も継続して調査を重ねる必要がある。また、保育の現場では指導する対象数が数名から30名近くまで幅があり、保育現場においてより実践的なリトミック教育をするための指導法や、幼児への関わり方についてさらに検討する必要がある。

〔謝辞〕 本研究にあたり、実践にご協力いただきました千葉市の音楽教室のお子様及び保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

■注

- (1) リトミック教育の創案者、作曲家、音楽教育家、1865年－1950年。
- (2) 板野平、音楽教育家、1928－2009年。
- (3) 二見美千代「リトミック指導法に関する一考察—乳幼児と母親たちのリトミックグループの分析」『千葉敬愛短期大学紀要第40号(3)』313頁、千葉敬愛短期大学、2018年。
- (4) 正式な名称は「EUDICO Linguistic Annotator」。もともとは言語学者のためにマックス・プランク心理言語学研究所で開発された。映像や音声に注釈をつけ整理することができるフリーソフトである。<https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/>
- (5) 音の時間的長さの比率。

■参考文献（五十音順）

- ・日本赤ちゃん学会監修、小西行郎・志村洋子・今川恭子・酒井康子編「乳幼児の音楽表現－赤ちゃんから始まる音環境の創造（保育士・幼稚園教諭養成課程）」中央法規出版、2016年。
- ・酒井徹「こちら心の音楽教室—お母さん、「本当のリトミック」を知っていますか？」ミクロコスモスミュージックスクール、1996年。

- ・河口道朗監修、エミール・ジャック＝ダルクローズ、河口眞朱美訳〔音楽教育学選集〕「リズム・音楽・教育」開成出版、2003年。
- ・細間宏通・菊地浩平編「ELAN入門—言語学・行動学からメディア研究まで」ひつじ書房、2019年。
- ・神原雅之・鈴木恵津子監修・編「幼稚園教諭・保育士養成課程—幼児のための音楽教育」教育芸術社、2010年。
- ・馬淵明彦・杉本明「これからはじめる即興演奏—豊かな音楽表現のために」オブラ・パブリケーション、2012年。
- ・二見美千代「リトミックの特徴とその理念についての一考察—リズム・ソルフェージュ・即興」『千葉敬愛短期大学紀要 第39号 (3)』441頁、千葉敬愛短期大学、2017年。
- ・二見美千代「保育士におけるリトミック指導の一考察—3歳児へのレッスンの取り組み」『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報』千葉敬愛短期大学、2017年。

■引用文献（五十音順）

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」平成29年3月告示。
- 2) 板野平監修、神原雅之・野上俊之編「ダルクローズ教育法による—リトミックコーナー」チャイルド本社、1987年、11頁。
- 3) 吉田裕昭・吉田源子「絵本で楽しくリトミック—指導案とピアノのひき方」マイクロコスモスミュージックスクール、1996年、7頁。
- 4) 吉田裕昭・吉田源子「絵本で楽しくリトミック—指導案とピアノのひき方」マイクロコスモスミュージックスクール、1996年、5頁。
- 5) エリザベス・バンドゥレスパー、石丸由理訳「リトミック教育のための原理と指針—ダルクローズのリトミック」ドレミ楽譜出版社、2012年、12頁。
- 6) 吉田裕昭・吉田源子「絵本で楽しくリトミック—指導案とピアノの弾き方」マイクロコスモスミュージックスクール、1996年、4頁。
- 7) エリザベス・バンドゥレスパー、石丸由理訳「リトミック教育のための原理と指針—ダルクローズのリトミック」ドレミ楽譜出版社、2012年、12頁。

ジングルベル

ピアボント作曲

資料 「ジングルベル」 楽譜